放送番組センターレポート
BROADCAST LIBRARY Report

2017.01 No.29

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110
http://www.bpcj.or.jp/

TOPICS 今号のトピックス

■公開セミナー 第42回名作の舞台裏「ありがとう」
■公開トークショー 第14回人気番組メモリー『ローカル路線バス 乗り継ぎの旅』
■カンヌ、ACC CM入賞作品上映会を開催＆「2016 秋の人気番組展」
■サテライト・ライブラリーおよび大学での番組利活用運用状況
■第2回番組保存委員会開催＆放送ライブラリー公開番組の紹介

■公開セミナー 第42回名作の舞台裏「ありがとう」

12月3日(土)、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、ホームドラマ全盛期の1970年代を代表する人気ドラマシリーズ『ありがとう』（TBS）を取り上げた。

[登壇者]　水前寺清子（出演）　長山藍子（出演）
　　石井ふく子（制作）
[司　会]　八木康夫（放送人の会）

1970年から75年まで全4シリーズ、合計187回にわたり放送された『ありがとう』。そのうち第2シリーズは、民放テレビドラマ史上最高視聴率56．3％を記録した。記録にも人々の記憶にも残る作品について、第3シリーズまで主演を務めた水前寺さんを始めとするお三方に語ってもらった。

高視聴率を記録した本作の企画のきっかけについて、石井さんは「あんまり考えずこのドラマを作った」と本音を漏らしながらも、「『ありがとう』という言葉が私は大好きで、その言葉でドラマを作りたいと思ったのが初めだった」と振り返った。

ひらめきに端を発した企画だが、主役の決定に至るまでには、苦労があった。今まで全くドラマ出演のない人物を、主役に立てたいと考えていた石井さん。「（ある番組で）何でもない感じで司会をしていたのがとても気にいった」と一目惚れしたその人が、水前寺さんであった。しかし、水前寺さんは歌手として多忙であったため、断られてしまった。それでも諦めきれなかった石井さんは、「トイレにはマネージャーは付いてこないと思い、スタジオの入口で待っていた」と話す通り、わずかな時間を見計らい何度も水前寺さんに声をかけた。

4月放送開始で準備が進行していた『ありがとう』。3月になり、「仕方がない。諦めます」と石井さんから言われた水前寺さんは、「美人の方がおやりになればいいじゃないですか」と再度断った。その時、石井さんから返ってきた言葉は「美人じゃないからいいのよ」。水前寺さんは驚きながらも、「その時は腹も立たずその通りだなと思った」と、出演を了承したという。

これに石井さんが「ずいぶん失礼なことを言ってすみません。7回ぐらい言いましたね」と謝ると、会場が笑いに包まれた。

脇を固めるキャストも豪華な本作品。数々の名作ドラマをプロデュースしてきた司会の八木氏は「当時このクラスの役者を揃えることが出来たのが、同業者として信じられない」と述べ、石井さんにキャスティングの極意を尋ねた。石井さんは「私は、この人とやりたいという思い込みが激しい。しつこいんです」と答えた。水前寺さんに声をかけた際の行動にも、その思いが強く表れている。

こうして走り始めた『ありがとう』。初めての芝居について水前寺さんは、お芝居をしようと思ったことはなく、「好きなようにやりなさい。怒る時は怒り、泣く時は泣く。私が全部しっかり受け止めます」と石井さんから言われた。水前寺さんは「色々な事を言われてもきっとだめだっただろう」と振り返った。石井さんの的確な指導が水前寺さんの自然な演技を引き出した。

また、母親役の故・山岡久乃さんが、水前寺さん自身の寡黙な母親と真逆であったため、照れずに演じることが出来たと語った。とはいえ、多忙で稽古に出られなかったため「NGを出さないように旅先で台本を覚えた」という。さらに、歌と芝居の世界について、歌は2分半～3分が勝負の世界であるのに対し、芝居は時間をかけて人物の心情を読み解く点が異なるが、当時は、歌の世界から突然飛び込んだため、深く考えることなく芝居に取り組んでいたと振り返った。

『ありがとう』が人々に支持された理由を、石井さんは「視聴率については考えていなかった。ただ心の優し

い家族の話を作りたいと思っていた。今はそれが一番失われているのではないかと思う。そうした意味で、再放送を今の子供たちが観ているというのは本当に嬉しい」と語った。長山さんは、山岡さんと水前寺さんの本物の親子のような掛け合いを、「今は親子でも出来ないけんかもある。あの時代に親子であれだけけんかしてあんなに仲良く見えるというのはチータ（水前寺さん）と母さん（山岡さん）の相性が良かったからだと思う。本気で愛

長山 藍子

しているからこそ、信じているからこそ、本気でぶつかっている。素敵な親子だった」と評した。水前寺さんは、『ありがとう』を観た親子にとって、本作が日々の親子関係を見直すきっかけとなっていたのではないかと語った。石井さんは「山岡さんはきちんと受け入れて、チータに愛情をもってやっていたので、私は本当に胸が熱くなりました」と、二人の掛け合いを称賛した。

八木氏が、「ホームドラマは、人も殺せないし病気にもさせられない。日常の些細なことでストーリーを作るという意味では、一番難しい」と述べると、石井さんは「今は家族の中に色々なサスペンスがある。それをどのようにしたら良いのかということをドラマの中で考えていきたい」とした上で、「それを皆さんが家族で観て、こういう事があるのだと思ってもらえるドラマを作りたいと思

八木 康夫

っている」と、ドラマ制作の展望を語った。

また、長山さんはこれまでの役者生活を振り返り、「役者はいただいた役の、あるいはそのドラマ全体のコンセプトの中で、自分のポジションをどうやって掴むのか考える。そのために、周りの方に支えられながら、自分を自分で育てていく」ものであると語った。そして、「透き通った部分を持ち続け、色々なものが入ってきても整理でき、様々なことが出来る人間になりたい」と、役者としての目標についても語った。

最後に、テレビドラマのこれからについて尋ねられた石井さんは、「今は人に対する優しさが欠けてきているんじゃないかと思う。色々な事を人にやってあげても忘れてしまうが、やっていただいたことは忘れない、それを私はこれからのテーマにしていきたい」と締めくくった。

会場からはこの作品に出会えたことへの感謝の声、登壇者からはこの作品に携わることができたことへ感謝する発言が多くあるなど、終始「ありがとう」という言葉に溢れた温かなセミナーとなった。

■公開トークショー 第14回人気番組メモリー『ローカル路線バス 乗り継ぎの旅』

10月8日(土)、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る「人気番組メモリー」が開催された。今回は、9月のオンエアで24作目となった『ローカル路線バス　乗り継ぎの旅（テレビ東京）』を取り上げた。

[ゲスト]　太川陽介（出演）、蛭子能収（出演）
　　キートン山田（ナレーター）、越山　進（制作）
[司　会]　秋元玲奈（テレビ東京アナウンサー）

太川 陽介

今回の応募者数は人気番組メモリー史上最多の2162名。最新作が放送されたばかりということもあり、視聴者の関心の高さが伺えた。

初回の放送は2007年。太川・蛭子コンビに女性ゲスト（マドンナ）を加えた3人が、路線バスのみを乗り継ぎゴールを目指すが、インターネットでの情報収集禁止、3泊4日でゴールに辿り着く等、厳しいルールが課せられた“ガチンコ旅”だ。ゲスト一同「こんなに長く続くとは」と喜ぶが、横浜から氷見を目指した第1回はルールも緩く、「大体のルートはリーダーの僕にだけは知らされていたし、路線バスがない場合はタクシーも使っていた（太川）」。転機は第2回。バスがないルートが続いた時、ディレクターがスタッフ車での移動を提案した。すると「マドンナの相本久美子ちゃんが『嘘をやって、ばれたら嫌。やるならちゃんとやりたい』と言い、皆そこで初めて腹が決まった」と太川さん。越山さんも「普通なら、実は車で移動していても“歩いたこと”にして編集するが、本当に歩いているのがこの番組」と明かす。「ある意味ドキュメンタリー。1日20キロ歩いたこともあり、マドンナのメイクも剥げてボロボロ（太川）」。「だから最近はどのマドンナもオファーを受けてくれない（越山）」とのこと。ナレーション録りの際に“最初の視聴者”となる山田さんも、「“実は車に乗っていた”という嘘は、絶対に画面に出る」と断言した。また、10年前は1キロ歩くのもやっとだった蛭子さんは、年齢を重ねているにも関わらず、最近は「5キロなら歩く」と自分から言うほど体力がついたのだという。

越山 進

視聴者の関心の1つは“ルートはどうやって決めているか”について。越山さんは「以前は“この季節ならこういう景色が見える”など旅番組っぽい要素を考えていたが、最近は、まだ行っていないエリアの中から、4日でぎりぎり行けるルートを調べて決めている」という。ルート周辺のバス会社全てに企画を説明し、「いつどのバスに乗るか分からないが、もし乗るこ

とがあったら対応をお願いします」という形で撮影許可を取っている。しかし、出演者の行動は制作者の思惑から逸れていくのが常。想定ルートを知っているのは越山さんとディレクター、ADだけなので、「『太川さん、そっちじゃない』と心の中で思いながらついていく(越山)」そうだ。

それぞれの回によって、ゴール成功か失敗か、はらはらさせられるのもこの番組の醍醐味。山田さんは、ナレーション録りの時に、ゴールできたかどうか事前に聞かないようにしているという。「台本を読みながらも最後まで結果が分からないのは、楽しみでわくわくする」と山田さん。太川さんは「第2回でゴールに失敗した時、これはオンエアしないなと思っていたら、失敗のままちゃんと放送したので驚いた」そうだ。越山さんは「最近は、『YOUは何しに日本へ』などガチンコ系の番組も増えたが、『バス旅』はそのターニングポイントになった番組」と分析した。

今や名コンビとも言える太川・蛭子ペアだが、番組開始時は初対面だった。「真面目な太川さんとマイペースな蛭子さんという、敢えてミスマッチを狙ってのキャスティング(越山)」だったというが、この二人は番組以外では一切会わないという。「この番組を大事にしたいから、他局から"蛭子さんと2人で"というオファーが来ても断っている。この番組で年3回会うのに、もっと会うと新鮮味がなくなっちゃう」と太川さん。終始おとぼけで、番組内のエピソードも「大体覚えていない」という蛭子さんは、「何か食べた後にウェットティッシュとか、水で濡らして首に巻くと冷んやりするグッズとか、色々出してくれる」とリーダーの気遣いぶりを披露した。

この10年間、路線バスの本数は減っており、以前運行していた路線が、数年後再訪した時には廃線になっていることも良くあるという。蛭子さんは「この番組は視聴率もまあまあで、バスも増えるかと思ったらあまり貢献できてない」と嘆く。そんな中でも、バスを利用するお年寄りや地元の人との交流が、番組の味になっている。ロケを見た人が、スタッフの分まで飲み物を差し入れてくれることもあるという。山田さんも「『バス旅』は"人情ふれあい旅"でもあるから、こういうシーンはほっとする」と頷いた。

「『バス旅』の前日は、ゴールのプレッシャーで眠れない」という太川さんは、「今までのテレビの流れをちょっと変えたこの番組に出会えて、本当に幸せ」という。グルメや豪華な宿は出てこないが、作り手側の嘘のない真剣勝負が、視聴者も一緒に手に汗を握り、ゴールを目指している気分にさせてしまう画期的な旅番組。会場からは熱心な質問も相次ぎ、終始笑いの絶えないセミナーとなった。

■カンヌ、ACC CM入賞作品上映会を開催

11月5日(土)、浜離宮朝日ホールで「第63回カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル入賞作品上映会」を開催した。この上映会は、講師による上映作品の解説付きで世界の優れたCMを見ることのできる数少ない機会であることから、毎年人気を博している。当日は今回の講師であるACC国際委員会委員長の鏡明氏から、冒頭、同フェスティバルの概要や歴史等の説明があった。グランプリ作品をはじめとする入賞作品40本に、詳細な解説を加え上映。参加者からは「解説付きなのでよく理解できる」、「字幕付きで見られる点がよい」等の感想が寄せられた。参加者243名。

また、12月17日(土)には、情文ホールで「2016第56回ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」を開催した。審査委員長の講評を収録した映像の上映の後、テレビCMの上位入賞作品を中心にテレビ・ラジオのCMを上映した。評価を得た国内のCMをまとめて見る機会は数少なく、毎年参加者からも大変好評の上映会である。参加者は168名であった。

■「2016 秋の人気番組展」

10月15日(土)～11月27日(日)、地上8局、BS7局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。各局の新番組や人気番組のポスター、台本、関連グッズ、番組で使われた小道具、セット模型・デザイン画などを展示した。今回は来場者プレゼントにTVerの協力も得た。

話題のTBSドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』のセット模型やテレビ朝日の『アメトーーク!』のスタジオを飾った「アメかえる」のオブジェの展示、新ドラマのセットデザイン画など、普段見る機会がない貴重な展示もあり、来場者から「セットの模型展示が良かった」「スタジオで使われた物や台本が見られて感動した」「様々な局の番組の情報が一度に見られて良かった」「毎回楽しみにしている」など多くの感想が寄せられた。

■サテライト・ライブラリーおよび大学での番組利活用運用状況

◇諫早市立諫早図書館での運用再開

11月26日(土) から諫早市立諫早図書館(長崎県)が放送ライブラリーの公開番組の視聴を再開した。昨年度に引き続き、同館の「ふるさとの文人コーナー」に用意した視聴用パソコン3台を使い、同市出身の脚本家・市川森一氏が手がけた作品を来館者が個別視聴できる。今回、視聴可能な番組は、市川森一氏脚本の3番組15本で、特に連続ドラマ「親戚たち」は同市内を舞台として1985年に制作された作品で、同市民から視聴の希望が多く寄せられていた。

【諫早図書館で視聴可能な番組】

○「木曜劇場　親戚たち　全13回」(フジテレビ)
○「明日　1945年8月8日・長崎」(日本テレビ)
○「スペシャルドラマ　幽婚」(CBCテレビ)

その他の公共施設での利用予定は、広島平和記念資料館(被爆・平和関連番組)、長崎原爆資料館(被爆・平和関連番組)、市川市文学ミュージアム(脚本家・水木洋子作品など)で、各館へ来館した利用者に、関連番組の個別視聴が可能となるよう、準備を進めている。

◇上智大学文学部で番組センター制作番組を利活用

本年度、上智大学文学部新聞学科の後期の「デジタルアーカイブ論」(柴野京子准教授・受講生数は20名) の授業に、放送番組センターが制作したシリーズ番組「名作のふるさと」、「人類・その明日　資源問題への挑戦」のテレビ2番組10本を利用して、番組のメタデータ作成実習を行っている。これは、テレビ番組を使って番組アーカイブの理論を実践的に学ぶものであり、番組は、1970年代から80年代にかけて当センターが制作し全国の民放で放送された番組である。

その他、今年度後期の大学での公開番組の利活用については、福岡県太宰府市にある筑紫女学園大学の現代社会学部「テレビ論」と「卒業ゼミナールⅡ」(荒巻達也教授)の2つの講義において、放送ライブラリーで一般公開している番組の中から、併せて10本の番組を利活用している。

当センターでは大学向けに利用パンフレットを作成し、教育現場での放送番組の利活用促進を周知していくこととしている。

■第2回番組保存委員会開催

11月17(木)に第2回番組保存委員会が開催された。

◇副委員長の選任

委員交代に伴い、久保委員長の指名により、佐藤副委員長(NHK) の後任として菅野利美委員(NHK知財センター長)を副委員長に選任した。

◇平成28年度保存対象番組の選定

テレビ番組1,064本を保存対象番組として選定すること、ラジオ番組は各賞受賞番組を中心にリストアップ済みの210本に、11月以降発表される受賞番組約200本を追加して選定することを諮り、了承された。

◇デジタル・アーカイブの連携

政府・知的財産戦略本部の「知的財産推進計画」では、近年、文化の保存・発展・継承およびコンテンツの二次利用や国内外における発信の基盤として、デジタル・アーカイブの連携に関する検討を進めている。当センターへの連携要請の経緯を説明した後、連携への対応案として、放送ライブラリーで「ドラマ」に分類しているテレビ、ラジオ番組のファクト・データのテキスト情報を連携することを諮り、了承された。

◇NHK広島放送局ハイビジョンシアターならびに長崎原爆資料館ホールで8月に開催したNHK・民放局合同上映会、および大学での番組利活用の状況について報告し、了承された。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーでは、12月末現在、テレビ番組15,720本、ラジオ番組4,195本、テレビ・ラジオCMを10,469本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している。

今年度に入り公開追加した番組は、テレビ150番組、ラジオ65番組で、主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

◇『あの歌がきこえる〔1〕　YaYa(あの時代を忘れない)　1982年　サザンオールスターズ』2006.4.5放送・NHK
◇『家政婦のミタ〔1〕』2011.10.12放送・日本テレビ放送網
◇『NHKスペシャル　3.11　あの日から1年　38分間　～巨大津波　いのちの記録～』2013.3.5放送・NHK

【ラジオ番組】

◇『前略、倉本聰様　～小山薫堂からの贈りもの～』　2014.3.23放送・エフエム東京
◇『ラジオ沖縄戦後70年特別番組　封印された三十一文字』　2015.5.30放送・ラジオ沖縄
◇『RCC特別番組　警察無線が記録した広島土砂災害』　2015.5.31放送・中国放送

公開番組は今後も順次追加していき、適宜、Webサイトや施設内設置のデジタルサイネージ、視聴ブース、本紙などで紹介し、利用者に番組の視聴を促進していく。